

平成24年度 【 学園研究費助成金 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ハナリ タカシ
氏名 羽成 隆司

研究期間 平成24年度

研究課題名 親密な他者にたいする嫌悪感・接触回避の研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	羽成隆司	文化情報学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

本研究では、繁殖適齢期である青年男女を対象として、肉親--両親およびきょうだい--に対する身体の接触回避がどのように生じているかを、性差を中心に分析し、次の仮説を検討した。繁殖適齢期の人々は、肉親にたいする親密さを強く持ちつつも、彼らとの直接または間接的な接触場面の想定を求められたとき、異性の肉親に対して一定程度の接触回避の意志を示すであろう。その傾向は女性回答者においてより明瞭であり、女性の肉親（母親、姉妹）よりも男性の肉親（父親、兄弟）にたいして強い接触回避の意志を示すであろう。なぜなら、女性は配偶者選択における失敗のコストが男性より大きいため、望ましくない特徴を持つ異性を強く回避することが、繁殖成功にとって合理的であるからである。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

- ・調査対象者：大学生 700 名程度を対象とした。
- ・調査方法：Kawano, et al. (2011)で用いた質問項目と同じものを用いた調査を集団実施した。
- ・質問項目：直接または間接的な接触場面を 8 種類想定し、その状況に対する快不快の評定を行わせた。接触対象は、両親、きょうだい、同性・異性の友人とした。
- ・分析：快不快の評定値を接触対象間、および、回答者の性差間で比較した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

肉親にたいする接触回避はどのように現れるのであろうか？本研究は、繁殖適齢期である青年男女を対象として、両親、きょうだい、同性および異性の友人に対する身体の接触回避がどのように生じているかを、性差を中心に分析した。大学在学中の男女 695名（286名の男性、409名の女性）が質問紙調査に参加した。質問紙調査では、両親、男きょうだい、女きょうだい、同性の友人、異性の友人各1名にたいして、直接または間接的な8つの身体接触場面において、それぞれの人物と接触することを、どの程度したくないと感じるか、および、それぞれの人物にたいする尊敬と愛情の程度について尋ねた。男女とも、肉親にたいして友人以上の尊敬あるいは愛情を示した。しかし、女性は、同性の肉親や友人よりも異性の肉親や友人にたいして高い接触回避の程度を示した。一方、男性は、このような対象者の性による接触回避の違いは示さなかった。女性は、異性の友人だけでなく、親密な異性の家族にたいしても性的な防衛を図っている可能性が推測された。女性による“異性にたいする潜在的警戒”が、日常生活の中で肉親を対象にしても見られたことは、何からのインセスト回避するためのメカニズムが、男性より女性に強く備わっている可能性を示唆していると結論づけた。

本研究は日本人大学生という限定されたサンプルを用いた検討であり、これがどの程度一般的な現象であるかは検討されなければならない。また、現代の日本文化における性役割的なステレオタイプが異性に対する女性の接触を回避させるように作用している可能性も当然ある。しかしながら、結果として日本人の若者において女性の接触回避がインセスト回避機能を持っている可能性を本研究は示唆している。今後は、関連する課題として、子どもの側から親への接触回避と、親の側からの子どもへの接触回避の比較、女性による同性への高い親和性についての詳細な分析を行っていきたい。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①接触回避	②インセスト回避	③肉親	④性差
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

○公開した研究成果

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 「接触回避尺度」開発の試み 東海学園大学人文学部紀要 (印刷中)

○今後の研究成果公開予定

「青年期日本人の肉親に対する接触回避」の題目で、日本行動進化学会の論文へ投稿する予定である。